

## 「お地蔵様の市」に学ぶ

八月二十四日は、祖父母の家でお地蔵様の市といって、子供達の手でお地蔵様をまつる行事があります。近所の幼稚園児から中学生まで、この日を楽しみにしています。

今年のお地蔵様の市は、雨にもかかわらず朝早くから二十人ぐらいの子供達が押しかけ、みんな、頭からぬれながらも一生懸命協力して周りを掃除したり、きれいに飾ったりしていました。午後からは、男子が箱を持って一軒一軒、志を受け取りに行き、女子は、お参りに来る人に渡すおだんごを作りました。小さな子が、手をあずきだらけにしながら、「何だか、働きに行ってるパパの帰りを楽しみに待ってるママの気分よ。」とおしゃまに言って、その場のムードを和ませていました。

夕方になると、お参りに来られる人も増え、私達はお茶とおだんごを配るのにてんてこまい。男子は、太鼓を持って声をからしながら、さかんに呼びかけています。しかし、今年は午前中雨だったせいか、お参りに来る人の数は例年より少なめでした。

男子は、かなり疲れたらしく、何かおもしろいことはないかな、ということでも、おさい銭箱に細工を始めました。箱の中の十円玉を取り出し、百円玉ばかりにするのです。そうすると次から来る人も百円玉。どんどんお金もたまるといふ考えなのでしょう。

ちようどそこへおばあちゃんがお参りに見え、おさいふの中を見ているけれど、十円玉しかないらしく、さっとお参りして、おだんごも受け取らず、曲がった腰をより曲げて逃げるように帰って行きました。男の子達は顔を青くして、そのおばあちゃんを追いかけてきました。私たちもついて行きました。おばあちゃんはとても喜ばれて、目に涙をためて「あんた達にきれいにしてもらってお地蔵様もさぞ、お喜びでしょう。」と頭を下げるのです。私たちは、自己嫌悪でおばあちゃんをまともに見ることができませんでした。それを見ていた近所の高校生のお兄さんが「このお祭りは何のためにするのか知ってるや。日頃お前達を守ってくれるお地蔵様に、今日は感謝する日だぞ。」と、さり気なく注意してくれました。

私達は、自分達だけでこのお祭りをやってるんだ、という考えがあったようです。しかし実際は、いろんな人の協力で行われているのです。そうでなければ、五十年以上も続くわけがありません。私達が疲れたところに、手作りのケーキを持ってきてくれるおばさん。「おだんご、おいしかったよ。」と言ってくれる人。小さな子供に、「頑張れよ。」と頭を軽くたたいて、はげましてくれる人。そういう人々に支えられて、私達が続けていけるのです。こんな時は、人のやさしさなどつくづくありがたいな、と思います。私にとって最後の参加になりましたが、このお祭りであるんなことを学びました。お地蔵様の市、是非とも続けていってほしいと思います。

昭和五十八年度『作文コンクール』（長崎県教育委員会）入賞作品